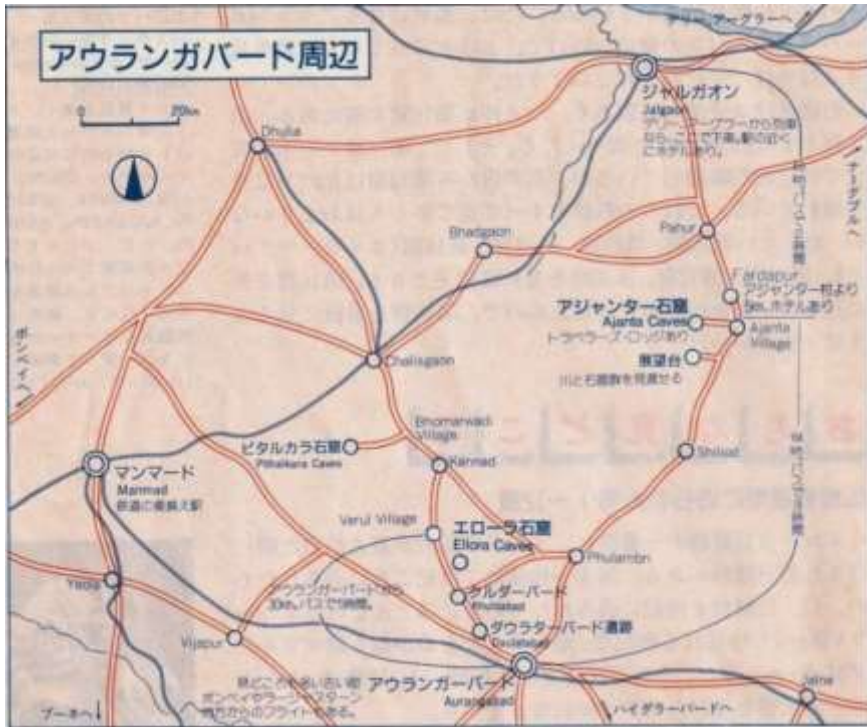


エローラ & アジャンター旅行

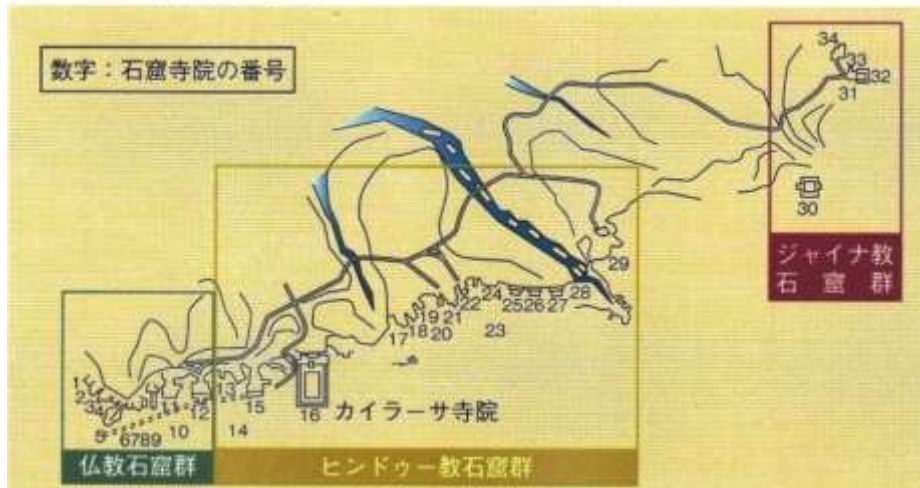
ムンバイから東へ空路 45 分のアウランガバード近郊に、インドが誇る二大世界遺産があることを知り、ムンバイ駐在 (1996~2001) 初期に家内と共に訪れてみました。

一つは古代三大宗教 (仏教・ヒンドゥー教・ジャイナ教) が一堂に会する「エローラ石窟寺院群」、もう一つはインド最高の仏教壁画が残る「アジャンター石窟寺院群」で、その概説をご紹介します。



エローラ石窟寺院群

+エローラ石窟群の配置図



三宗教の共存

仏教・仏像



ヒンドゥー教 ガネーシャ像



ジャイナ教 ヴィーラ像



◆ 絶壁をくりぬいた寺院

インドの中部、デカン高原の山中に並ぶ34もの石窟寺院が、エローラ石窟群である。ここは、仏教、ヒンドゥー教、そしてインド独自のジャイナ教の3つの宗教寺院が、それぞれの信仰を害することなく共存しているという特異な地である。

石窟は時代とともに、南から北へと順番に築かれた。最初にこの地にやってきた仏教徒が3〜8世紀にかけて第1窟から第12窟までを、次にやってきたヒンドゥー教徒が7〜9世紀にかけて第13窟から第29窟までを、そして最後にやってきたジャイナ教徒が9〜10世紀にかけて第30窟から第34窟までを造営した。

こうして小さきさまの寺院が、2.5キロもの距離に渡って並ぶことになったのである。

◆ いまも現役の信仰の地

これらの石窟寺院のなかでも、もっとも規模が大きいのが第16窟のカイラーサ寺院である。カイラーサとは、ヒンドゥー教で破壊と再生を司るシヴァ神が住むカイラス山にちなんだものだ。

驚くべきことに、ひとつの巨大な岩山が鑿と槌だけで掘り抜かれてつくられている。高さ33メートル、幅47メートル、奥行81メートルの大規模なもので、「インド最大の石彫寺院」と呼ばれる。

やがてジャイナ教徒がこの地を離れると、新しい石窟がつけられることはなくなった。だが、信仰の地として忘れ去られたり、ほかの遺跡のようにうち捨てられたりするとはなかった。現在も3つの宗教の聖地であり、参詣者が途絶えることはない。



お も な 見 ど こ ろ

仏教衰退期に造られた第1〜12窟

エローラ石窟群の一番南に、インドで仏教が衰え始めた頃に造られた石窟群がある。第1〜10窟は7世紀ごろに造られたもの、11、12窟は8世紀に造られたものだ。ほとんどはヴィハラー Viharaと呼ばれる僧院で、最も大きなものが第5窟マワルワダ Maharwadaだ。それぞれ特徴があるが、11、12窟は、ヒンドゥーの影響を受けたスタイルになっている。

エローラ最大の見どころカイラーサナータ寺院を含む第13〜29窟

エローラ石窟群の中心に位置する第13〜29石窟はヒンドゥー教窟。シヴァ神を始め、多くのヒンドゥー教の神々が祀られている。造られたのは9世紀頃。

想像を超えた大建築、カイラーサナータ寺院 Kailasanath

第16窟カイラーサナータ寺院は、言葉で表現できないほどのとてつもない建築物だ。石窟といっても、岩山の裾から寺院全体を丸ごと掘りだしたもので、奥行83m、幅46m、高さ35mのまったく縦目のないひとつの巨大な彫刻なのだ。インド国内でも他に例を見ない貴重な建築物。人間の力には限りがないことを実感させてくれる世界的な遺跡だ。



カイラーサナータ寺院のレリーフ

カイラーサナータ寺院



アジャンター石窟寺院群



デカン高原の北西、アウランガーバードから北へ約104kmの所にある仏教窟院群。馬蹄形にカーブするワグラー川沿いに、600mにわたって30の窟院があり、壁画や彫刻などの貴重な文化遺産が残されている。

アジャンターの名を有名にしたのは、素晴らしい壁画の存在である。インドの古代絵画は、アジャンターの壁画以外にはほんのわずかしが残っていない。しかも、これらは中央アジアや中国、日本などの古代仏教絵画の源流ともいえるものだ。

エローラの窟院群が、その巨大さで人を圧倒するとすれば、アジャンターの窟院群は美しさで人を圧倒すると言えるだろう。

アジャンターの石窟群は、ふたつの時代に大きく分けられる。紀元前1世紀頃から1世紀にかけての前期窟と、5世紀中頃～7世紀頃にかけての後期窟である。前期窟はいわゆる小乗仏教の時代（ヒーナヤーナ期）のもので、仏陀の姿を直接表現することはなく、仏塔や仏足跡、あるいは菩提樹などで示していた。

その当時、西インドに大きな勢力をもっていたサタヴァーハナ朝は、次第に衰退し、3世紀中頃には完全に滅んでしまう。同時に西インドの経済も衰退し、石窟建造も途絶えてしまうこととなる。

石窟建造が再開されたのは、5世紀中頃。この頃は、いわゆる大乘仏教の時代（マハーヤーナ期）で、仏陀が仏像の姿で表現され、装飾も豪華になる。有名な壁画はほとんどこの時代に描かれたものである。

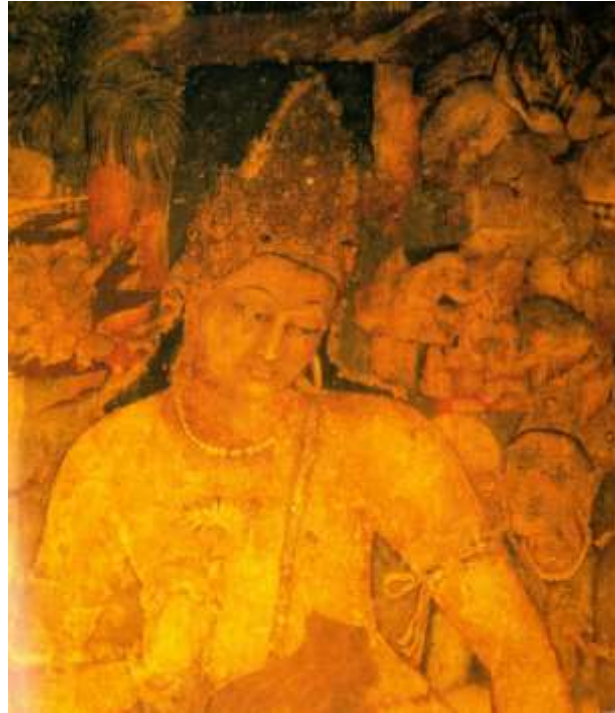
8世紀に入り、仏教が衰退するとアジャンターはジャングルに覆われ、それから1000年以上もの間、忘れ去られてしまう。しかし、1819年、マドラス駐屯のイギリス騎兵部隊の士官によって発見されてから、一躍有名になった。

お も な 見 と こ ろ

■後期窟

●第1窟

アジャンター石窟群のなかでも最高の見どころ。6世紀頃に掘られたヴィハーラ窟で、宮殿を思わせる豪華なつくり。質の高い壁画が数多く残っており、美術品としても超一級の価値がある。なかでも、後廊左手にある持蓮華菩薩像Bodhisattava



Padmapaniは傑出した作品。気品に満ちた表情と微妙に屈曲させた姿勢が、神秘的でたいへん美しい。この壁画は法隆寺金堂壁画のモデルにもなっている。また、後廊右手にある黒姫Black Princessは、豊満かつ上品かつ官能的で、現代では決して表現できない新鮮さをもっている。



●第2窟

第1窟と同様、6世紀頃に掘られたヴィハーラ窟。列柱に施された浮彫装飾が見事。仏陀の前世説話「ジャータカ」から題材をとった王の行進、王妃マーヤーの仏陀懐妊の図、仏陀誕生の図などの壁画がある。天井の絵は仏教画ではないが、当時の人々の生活を伝えている。

●第6窟

上下二層からなるヴィハーラ窟。壁画には大小さまざまな仏像が彫り出されている。

●第16窟

簡素なつくりのヴィハーラ窟だが、柱には壁画が残され当時の豪華さが伝わってくる。

仏陀の異母弟ナンダが、結婚式当日、帰郷していた仏陀に出家を命じられ、それを知った新妻スダリーが悲しみにうちひしがれる姿を描いた**死せる女王Dying Princess**は必見。弓を引くスィッダールタ王子の壁画も秀作。



●第17窟

最も保存状態のよい壁画がある。召し使いとともに宮殿内を歩く王と妃（窓から2人の女性がのぞいているのがおもしろい）、托鉢しながらカピラ城へ戻った仏陀を迎えるヤショーダ妃と息子のラーフラ王子、踊り子のダンスを見る王と王妃などの壁画が色鮮やかに残されている。

●第19窟

後期窟のなかでも代表的なチャイティヤ窟。2本の柱に支えられた入口には大小の仏陀の立像・座像が彫られ、当時の美術水準の高さがうかがえる。



釈迦の生涯とインドの八大聖地

生者必滅を説いた釈迦ゆかりの地は、現在聖地とされ、熱心な信者を集めている。八大聖地と共に釈迦の生涯を追ってみよう。

●第一の聖地ルンビニー

仏教の開祖の釈迦は、本名をゴータマ・シッタールタ（紀元前563〜483年頃、別説では463〜383年頃）と言いい、国境のネパール側にあるルンビニーで生まれた。シヤカ族の王妃マヤ（摩耶）夫人が、ここで樹木の枝を右手に握ったまま産んだという。父親は、25km西方のカピラバストゥに都を置くストゥダーナ王であった。

●第二の聖地ラーシギル

29歳の時、求道のために妻子を置いて、先ず訪れたのがラーシジャグリハ（王舎城、現在のラーシギル）である。ここには修行僧たちが集まっていた。釈迦はパンタ



ブッタ・ガヤの大塔窟内には様々なブツダ像が並ぶ

バ山（白善山）に籠もり、次いで評判高い高僧アララ・カラマ他の先覚者に教えを乞うた。しかし、やがて孤高の求道者として旅立った。

●第三の聖地ブッタ・ガヤ

粗衣粗食、苦難の旅を続けた釈迦は、ネーランジャラー川畔のウリベラの森（現在のブッタ・ガヤ）に辿り着き、瞑想の行に入った。こうしてある日、一本の菩提樹の下で

絶対の境地に入り、悟りを開き、ブツダ（悟者）となったのである。35歳の時であった。

●第四の聖地サルナート

ベナレスに近いサルナート（鹿野苑）は、ブツダが初めて宗教活動、初転法輪（説法）を行なった場所である。

当時、この地は修行僧たちの集う聖域だった。ブツダは以前の修行仲間5人の僧を訪ね、法を説いた。

●第五の聖地サヘート・マヘート

大勢の弟子を率いるブツダは、やがてコーサラ国の都サヘート・マヘート（旧名シユラーバステイ）を訪ねる。この土地の長者スタックは仏教に帰依し、祇園精舎を寄進した。ここを基点に、ブツダの布教活動は飛躍的に拡大した。宗教家や王族はもちろん、一般大衆も仏教に帰依するようになった。

●第六の聖地サンカーシャー

ある時、ブツダは奇蹟を行ない、サヘート・マヘートから天界へ上った。そして、釈迦生誕後7日目にして亡くなった母親マヤ夫人や一族の者に会い、仏法を説き、天上の人々をも帰依させた。そして、3か月後に再び地上に降り立った場所が、サンカーシャーであった。

●第七の聖地バイシャーリー

晩年のブツダは、再び孤高の人となり、弟子のアーナンダ一人を連れて、説法の旅に出るようになった。当時の大きな商業都

市バイシャーリーには、一人の娼婦が住んでおり、かねてより深く仏法に帰依していた。娼婦の望みをかなえて、ブツダはその館に留まり、食事を受けた。このことが、仏教の教へと重なり、人々の言い伝えるところとなった。

●第八の聖地クシナガル

ブツダ入滅の地。45年間の布教活動をしたブツダは、すでに80歳になっていた。パーバー村という所で、鍛冶工のチュンタの料理した茸を食べた釈迦は、突然激しい腹痛に襲われ、クシナガルまで運ばれたが、ついに力尽きた。



釈迦の伝記のレリーフ。サルナート考古学博物館



仏教の八大聖地

仏教は誰のために

さて、自分が生まれる前からある物については、昔から当たり前のように錯覚してしましますが、伝統的なものについては、特にその傾向が強いと感じます。

例えば、仏像もそうです。

実は、仏像というものは、お釈迦さまが生きておられた時代にはなかったもので、お釈迦さまが亡くなってからでも仏像製作は禁止されていました。

仏像の起源は、仏教がシルクロードなどの交易とともに世界に広がり、ヘレニズム文明と交流し、ガンダーラで起こったとも言われています。

初めて仏像が作られたのは、お釈迦さまが亡くなってから 500 年後位だそうです。

言い換えれば、それまでにはなかった新しい形を作った人がいたということです。

作ってはいけないものを作ったのですから、当然、猛反発があったことだろうと想像します。

さらに月日は流れ、仏教はアジアの広範囲に伝わり、仏像もガンダーラから東南アジアや中国、そして日本に伝わり、各地域の文化が反映されて形も変化してきました。

このような仏像の変化は、地域や時代によってさまざまな影響を受けたイメージを形にするために新しい技術や工夫を取り入れた証です。

何の工夫もせず「今までどおり」を貫いていれば変化は起こりません。

若い頃、五十歳も超えれば自己も確立していて落ち着いているだろうと想像していましたが、確立するどころか変化は激しくなっていくばかりです。

逆に考えれば、変化しない自己を確立するためには、他からの影響を遮断しなければならないのかもしれませんが。

しかし、それは自己満足にしか過ぎず、時代や社会に取り残されることを意味すると同時に「完成したと思いついでいる自己」への執着を生むことにもなるでしょう。

あらゆる「執着」は、悩みや苦しみを生む原因であると仏教では考えます。

仏教の根本の一つ「諸行無常＝全ては変化する」を受け止め考えることは、「こうあるべき・こうあらねば」という「決め付け・思い込み＝執着」を見つめ直し、自由にニュートラルな思考を生むものだと感じています。

「べき・ねば」という「固定観念＝とらわれ」に気付き、新しい一歩を踏み出すチャンスに繋がるかもしれません。

以上、我が街の光明寺さんから頂いた読み物の中に上記「仏教は誰のために」があり、前ページのお釈迦様に関係している部分と共に、現代社会を生きる術のような部分が載っていましたので、紹介させていただきました。